

心理学教科書とP-Fスタディ

藤田主一

はじめに

Saul Rosenzweig によって創案されたP-Fスタディは、The Picture-Frustration Study の略称で、心理検査のなかの投影法 (projective method) に属している。投影法は、比較的あいまいな絵や図形、文章などの刺激材料に対する被検者の自由な反応から、その人の人格像を把握する方法である。同じ投影法でも、ロールシャッハ・テスト (Rorschach Test) や TAT (Thematic Apperception Test) などは、検査手続き、つまり実施法や分析法、解釈法が複雑であり、高度の専門性が要求される。これに対して、P-Fスタディは、それらの手続きがどちらかといえば制限的な枠組のうえに実施され、結果の処理法についても客観的に行うことができる。また、アメリカだけでなく、日本、フランス、ドイツをはじめ複数の文化圏で標準化が行われており、それぞれの地域において臨床的に、そして研究上の用具として広く利用され、その学問的価値は極めて高い。

さて、P-Fスタディは日常生活において誰もがごく普通に経験する24種類の比較的軽い欲求不満場面で構成されていて、被検者の主観的な反応から、その人の力動的な人格像が得られるように工夫されている。欲求不満場面は2つの刺激材料、つまり漫画風の絵画刺激と左側人物の言語刺激から成る。全24場面は、大きく自我阻害場面 (Ego-Blocking Situation) と超自我阻害場面 (Superego-Blocking Situation) に二分でき、前者は人為的あるいは非人為的な障害で自我が阻害されるもの、後者は他者からの非難・詰問により超自我が阻害されるものである。

P-Fスタディの各場面に対する反応について、Rosenzweig は2次元のカテゴリーからの分類を試みている。すなわち、欲求阻止状態で自我の攻撃方向を問題にするアグレッションの方向 (Directions of Aggression) と、反応展開を問題にするアグレッションの型 (Types of Aggression) がそれぞれである。さらにアグレッションの方向は他責的 (Extraggession, E-A)、自責的 (Intraggession, I-A)、無責的 (Imaggession, M-A) の3方向に、アグレッションの型は障害優位 (Obstacle-Dominance, O-D)、自我防衛 (Ego-Defense, E-D)、要求固執 (Need-Persistence, N-P) の3型に分類される。これらの相互の組合せにより基本的に9種類の評点因子 (Scoring factors) の

成立が可能である。そして、24場面を通しての評点因子の出現頻度ならびにその特徴、社会的適応度の指標となる GCR (Group Conformity Rating), 反応転移 (Trends) などを総合して人格像を浮き彫りにするところに、P-F スタディの心理検査としての特徴が認められる。

このような論述は、P-F スタディの一般的な要件であり、その解説書や心理検査の理論的、実際的な側面を扱う専門書においては周知の事実といえるだろう。また、それらの専門書には検査を用いた臨床的応用例が詳細に組込まれているのが通常であろう。ところで、心理学に接する人が教養としての心理学書あるいは心理学教科書を手にする機会は多いと思われる。そこには、これらの書物からの知識が発展し、さらにより深い専門性を修得していく過程が含まれている。

本研究は、これまでに述べた問題意識を基本に、Rosenzweig が独自の欲求不満理論に基づいて創案した P-F スタディを、一般の心理学教科書のなかでどのように扱われているかという観点から位置づけることが目的である。本研究の方法は、市販されている心理学関係の書籍のなかから、主として一般心理学あるいは心理学概論に関する教科書を調査対象に選択した。従って、教育心理学、発達心理学、臨床心理学、性格心理学および心理検査書や特殊な専門書、翻訳書は除いた。今回、分析の対象にした教科書は、1989年10月31日現在で入手が可能だったものから、1980年以降に発行された130冊^{注)}である。表1に示した数値は、1980年度から1989年度の10年間

表1 年度別の調査教科書数

年 度	1980	1981	1982	1983	1984
冊	7	13	10	10	19
年 度	1985	1986	1987	1988	1989
冊	15	15	15	15	11

に発行された教科書のうち調査対象になった冊数である。その出版社数は39社に及んだ。なお、旧版が新訂あるいは改訂された教科書はその時点をもって初版扱いにした。1980年以前に発行された書籍には大著が多数（たとえば、八木冕（編）「心理学 I・II」培風館1967, 1968；相良守次（著）「心理学概論」岩波書店1968；大山正・詫摩武俊（共編）「心理学通論」新曜社1973；横瀬善正・萩野源一（編著）「新心理学」八千代出版1977など）含まれているが、今回の趣旨からすべてを除いた。

調査対象の教科書から得られた Rosenzweig ならびに P-F スタディに関する資料は、それらに関連する事項のすべてにわたって記録、処理された。具体的には、Rosenzweig に関してはその出典の有無、表記法、記載場所、記載量、記載内容、執筆担当者など、また P-F スタディに関しては、出典の有無、表記法、記載場所、記載量、記載内容、図版の有無、公刊年、執筆担当

者などである。本研究においては、それらのなかから主要な諸点を中心に、心理学教科書に扱われている現状と課題についてまとめた。

Rosenzweig の片仮名表記

1. Rosenzweig の扱われ方

まず、Rosenzweig の人名が教科書の本文または索引欄に記載されているか否かを調べたところ、130冊中の55冊（42.3%）にその名前が認められた。次に、Rosenzweig の表記法つまり Rosenzweig が教科書中に紹介される時、あるいは引用される時にはどのような表記になっているかである。これは彼自身の人格を表すのかもしれない。そこで、記載のあった55冊において Rosenzweig の片仮名表記を選出し集計した。表2は、表記例を実数値と比率に分けて示したものである。ここに掲げた数値は、あくまでも1冊中に1表記の場合を前提にしたものである。従って、その教科書の執筆担当者がどの立場に基づいているかを知ることができる。

表2 Rosenzweig の表記例

表 記	実 数	%
ローゼンツヴァイク	29	52.7
ローゼンツワイク	12	21.8
ローゼンツァイク	4	7.3
ローゼンツワイグ	3	5.5
その他	7	12.7

表からも明らかのように、最も多用されている片仮名表記は「ローゼンツヴァイク」で、55冊中の29冊、全体の52.7%である。以下、「ローゼンツワイク」の21.8%、「ローゼンツァイク」の7.3%、「ローゼンツワイグ」の5.5%の順である。原音に近い表記か慣用的な表記かの判断は難しいところだが、いずれにしても「ローゼンツヴァイク」を半数以上の教科書が採用しているのである。表中の「その他」には「Rosenzweig（原綴）」、「ローゼンツヴァイグ」、「ローゼンツバイク」、「ローゼニツゥイク」などが含まれる他に、同一教科書でありながら執筆個所の担当者が異なるために「ローゼンツヴァイク」と「ローゼンツワイク」の2通りの表記で統一されていない例も見られた。また、索引欄に明らかに別人と思われる綴(Rosenzweig, M. R.)もあった。これほどいろいろな表記例のある学者も珍しいのではないだろうか。これらの結果を基本にしながら、Rosenzweig に関わる以下の諸点を問題提起したい。

2. Rosenzweig 表記例の周辺

(1)P-F スタディ日本版作成者(住田勝美・林 勝造・一谷 彊ほか, 三京房)は「ローゼンツァイク」と表記している。それは, 1956年版の解説書(児童用)や1957年版の解説書(成人用), 1964年版の使用手引(改訂版), 1964年版の「人格理論」, 1987年版の解説書(基本手引)ともに共通である。ところが, この表記例は表2に示したように教科書中では多用されていない。執筆担当者が Rosenzweig をどう読んだかなのだろう。

(2)P-F スタディの検査用紙上段に書かれている原著者欄であるが, 発行当時の「ローゼンツァイク」が今日, 筆者の手元にある児童用, 成人用は「ローゼンツワイク」になっている。しかし青年用発行を機に, 児童用, 成人用とも「ローゼンツァイク」に統一され, そこに日本版作成者の統一の見解がうかがえる。

(3)日本心理学会発行の「心理学研究」第59巻第4号(1988)の258ページ(会報)22行目には, 「ローゼンツワイク氏(米)」の記述がある。

(4)代表的な心理学関係の辞典の表記例を引用してみよう。①平凡社「心理学事典」(1957), 「新版心理学事典」(1981)は, 執筆担当者は異なるが共に「ローゼンツワイク」である。②誠信書房「心理学辞典」(1971)は, 事項および人名欄の計3カ所ともに「ローゼンツワイク」である。③有斐閣「心理学小辞典」(1978)では事項および人名欄の計3カ所に記載されているが, 3名の執筆担当者により「ローゼンツヴァイク」と「ローゼンツワイク」が2対1の割合である。④協同出版「心理学小辞典」(1978)は, 事項および人名欄とも「ローゼンツヴァイク」である。⑤岩波書店「心理学小辞典」(1979)は, 2カ所の事項説明とも「ローゼンツワイク」である。⑥北大路書房「心理学辞典」(1980)では, 5カ所の事項に「ローゼンツワイク」「ローゼンツヴァイク」「ローゼンツァイク」と執筆担当者により3種類が認められ, 人名欄は「ローゼンツワイク」である。

(5)一般の人名辞典等ではどうなっているのだろうか。Rosenzweig の読み方に絞って述べよう。①三省堂「固有名詞英語発音辞典」(1969)は「rouzen-tswaig, tsvaix (Ger.)」と読む。②岩波書店「西洋人名辞典(増補版)」(1981)は「ローゼンツヴァイク」と読む。③日外アソシエーツ「西洋人物レファレンス事典」(1984), 「西洋人名よみかた辞典II」(1984)では, 比較的多用されている代表的読み方として「ローゼンツワイク」を, 異読み(その他の読み方)として「ローゼンツヴァイク」を挙げている。

以上, Rosenzweig の片仮名表記は決って統一されているとはいえない。いずれも研究者や執筆者の方針, 引用例などの違いによるものだろうが, 同一の見解が望まれるところである。

教科書における P-F スタディの諸相

1. P-Fスタディの位置

ここでは、RosenzweigのP-Fスタディが教科書のなかに心理検査の1つとして扱われているか否か等の諸相についてまとめることにする。まず、上記の教科書130冊に心理検査として紹介されている比率を、本文ならびに索引欄を手掛りに調べた。その結果、紹介のある教科書92冊(70.8%)、紹介のない教科書38冊(29.2%)であった。記載されている分野は「性格の診断」「人格の診断」「人格検査」「パーソナリティの測定」「パーソナリティの理解」「心理テスト」など投影法検査の例としての位置が中心である。それ以外には、「欲求」「動機と行動」「適応とパーソナリティ」「適応と不適応」「フラストレーション」「フラストレーションと葛藤」など、RosenzweigがP-Fスタディを創案するに至った理論から出発した領域にも見受けられた。たとえば、フラストレーションから適応機制へ話題が進み、適応機制のなかの攻撃機制をいわゆる外罰、内罰、無罰の方向性で捉える心理検査(用具)にRosenzweigのP-Fスタディが取り上げられるといった具合である。

本文中の扱われ方を上述と同じ92冊で調べた。それによると、検査の構成(たとえば理論的背景、作成者、絵画刺激の数、反応の方法など)や解釈基準(たとえば攻撃の方向と攻撃の型についての解説、表示など)等が、複数行にわたり説明の加えられたもの39冊(42.4%)、上述の分野や領域で単にP-Fスタディの名称のみが紹介されているにすぎないものが53冊(57.6%)であった。内容説明の比率は、同じ投影法であるロールシャッハ・テストやTATに比べると、残念ながら肩を並べるとは決まっていえない数値であろう。

なお、RosenzweigをP-Fスタディの作成者として紹介している教科書は、Rosenzweigの名前がある55冊のなかの27冊(49.1%)であった。

次に、92冊中に示された「P-Fスタディ」の表記法についてである。これも本文ならびに索引欄からまとめた。その結果、「P-Fスタディ」とのみ表記している教科書が35冊(38.0%)、「絵画-欲求不満検査(テスト)」が9冊(9.8%)、「PFT」が3冊(3.3%)である。ところが、最も多い表記法は「P-Fスタディ」と「絵画-欲求不満検査(テスト)」を並記している場合で、92冊中の45冊(48.9%)に認められた。並記の仕方は、「P-Fスタディが正式で、絵画-欲求不満検査(テスト)ともいう」の場合と、その反対の立場のいずれかである。

もともこの心理検査が三京房から公刊された時の名称は「絵画-欲求不満テスト(Rosenzweig P-F Study 日本版)」であり、当初は「絵画-欲求不満テスト」と「テスト」を前面に出し、P-Fスタディは別称扱いだった。検査用紙、記録票の表紙にもこのように印刷されていた。のちに、利用者への印象を配慮して、また検査の内容を知られないためにP-Fスタディの名称を前面に押し立てたようである。しかし、教科書においては検査名で実体がある程度推測できるように「絵画-欲求不満検査(テスト)」を並記しているのだろう。

林 勝造は、解説論文のなかで、P-Fスタディの表記について、なぜP-Fテストと叫ばない

かとの理由を Rosenzweig 自身の言葉を引用して、「検査は元来、一定の標準によって個人の位置を決定するものであって、個人の成績を判定すべき外的標準を具えているが、P-Fスタディには本来このような標準を必要としないから、いわゆる“検査”ではない。P-Fスタディにおいては各個人毎の反応を母集団として、これら反応間の内的一貫性をもとめることによって個性を理解しようとするものである。したがって“検査”の必要条件である標準をかならずしも重視しないので、これを“検査”というのは妥当でない」と述べているのは興味深い。

P-Fスタディの公刊年を本文中に記述している教科書が合計13冊あった。順に、1945年が6冊(46.1%)、1944年が4冊(30.8%)、1948年が2冊(15.4%)、1946年が1冊(7.7%)である。これらは年代からして Rosenzweig の原版を意味しているのは確かだが、児童用が1948年としても、果たして成人用の公刊はどの年が正しいのだろうか。ちなみに、日本版は児童用が1956年、成人用が1957年、いずれも標準化の後に公刊されている。

2. P-Fスタディ図版の種類

P-Fスタディは投影法的一种であるため、比較的あいまいな刺激が存在する。それが絵画刺激(登場人物の表情は抑えている)と言語刺激であることは前述した。そこで、P-Fスタディ名が本文中で紹介されている92冊のなかで、同時にP-Fスタディ図版も掲載されている比率を調べた。その結果、30冊(32.6%)に何らかの図版があり、残り62冊(67.4%)には存在しなかった。また、調査した全130冊の教科書に、P-Fスタディの名称と図版の両方が紹介、記載されている割合は23.1%である。

では、具体的な図版であるが、30冊のなかに39枚の図版が複数掲載され、その種類は17種に及んだ。表3はそれらをまとめたものである。表に示されるように、最多掲載図版は成人用では例題および場面1の7枚(図1)、児童用では例題の6枚や場面1の3枚(図2)などである。以下、成人用では場面2、場面7が各2枚、場面4、場面8、場面11、場面16が各1枚、児童用では場面2、場面6、場面18が各1枚と続く。成人用図版が多いものの、どの図版を利用するのは全く執筆担当者の自由裁量の範囲だが、なかでも例題が多いのは、具体的な場面図版を掲載することに躊躇した現れと解釈してよいだろう。

表3 P-Fスタディの掲載図版例(図版数)

	児童用	青年用	成人用	その他
例題	6	例題 2	例題 7	オリジナル 3
場面1	3		場面1 7	
その他	3		その他 8	

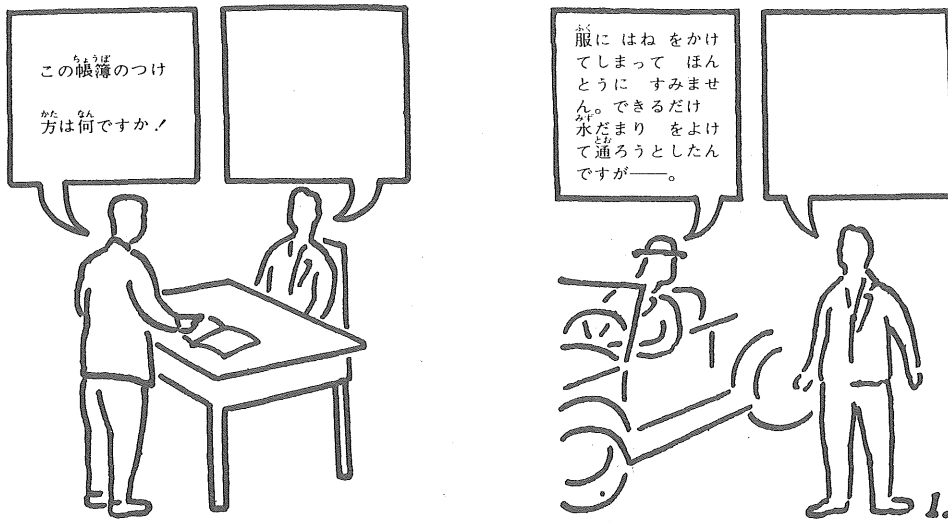


図1 最多掲載図版（左：成人用例題，右：成人用場面1）



図2 最多掲載図版（左：児童用例題，右：児童用場面1）



図3 青年用例題

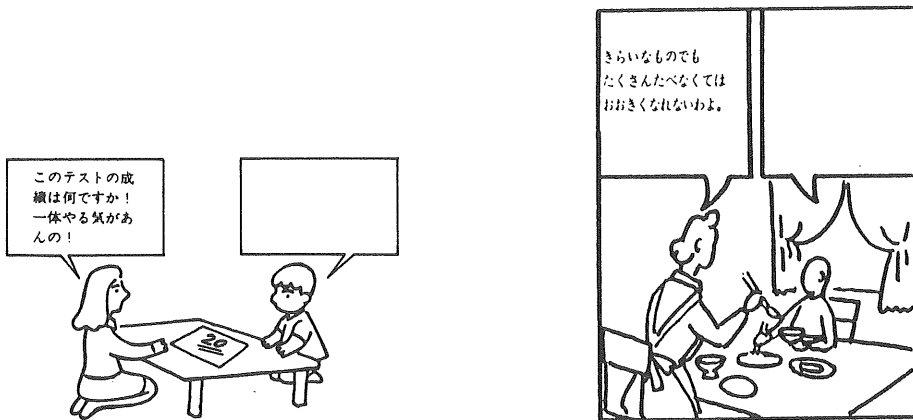


図4 オリジナル図版例 (左: 駒崎, 右: 清水・高嶋ほか)

ここで特徴的なのは、P-Fスタディの青年用が公刊されたのを機に、青年用例題(図3)を掲載した教科書が2冊あったことである。今後、この傾向は増え続けると思われる。そして同時に、従来は外罰、内罰、無罰と呼ばれ定着していたアグレッション(攻撃)の方向を他責、自責、無責に改めている点も見逃せない事実だろう。

もう一点は、P-Fスタディの掲載図版に類似のオリジナル図版を使用している教科書が3冊あったことである。図4に、そのうちの2例を示した。実際の原図版を載せるよりは、オリジナル図版を載せる方が良心的という執筆者の考えの現れかもしれないが、日常生活でのフラストレーション場面は無限といってよいだろうから、その図版の言語刺激や絵画刺激が示す意味や、また反応した場合のパターンや解釈基準なども合わせて示した方が、より一層良心的といえるのかもしれない。いずれにしても、オリジナル図版は新しい試みなため、P-Fスタディ原版と比較して検討してみる必要があると思われる。

本研究では、一般心理学教科書に扱われたRosenzweigおよびP-Fスタディの諸相について検討した。それらの諸結果については本論で詳細に記述されている。今後、一般心理学教科書以外にも範囲を広げ、本研究の目的をさらに完成させていきたいと考えている。

(注)

- 足立明久・塩見邦雄 編著 「事例で学ぶ心理学」 1985 勁草書房
 安藤延男・光岡征夫 編著 「入門 心の科学」 1987 福村出版
 青木孝悦・萩原 滋・箱田裕司 著 「一資料中心— 一般心理学」 1984 関東出版社
 青木民雄・内藤 徹 編著 「心理学要論」 1985 福村出版
 青柳 肇・瀧本孝雄・杉山憲司・矢澤圭介 編著 「こころのサイエンス」 1989 福村出版
 青柳靖夫・三本 茂 共著 「現代心理学の基礎」 1984 国土社
 荒木紀幸 編著 「わたしがわかる あなたがわかる 心理学」 1987 ナカニシヤ出版
 大坊郁夫 編著 「わたしそしてわれわれ—現代に生きる人のための心理学テキストブッカー」 1988 北大路書房
 土井敏彦 著 「心理学ノート」 1984 北樹出版
 江川玟成 著 「心理学」 1981 福村出版
 藤永 保 著 「増補 現代心理学」 1984 筑摩書房
 福田幸男 編著 「心理学」 1984 川島書店
 福島脩美 著 「心へのアプローチ」 1988 福村出版
 福屋武人・都築忠義・浅田隆夫・成田弘子 編 「こころのサイエンス」 1984 学術図書出版社
 濱田哲郎・園田五郎・白樫三四郎 編 「現代の心理学—人間の心理と行動—」 1982 朝倉書店
 原岡一馬 編 「心理学概論」 1986 ナカニシヤ出版
 原岡一馬 編著 「心理学—人間行動の探求—」 1986 福村出版
 橋本仁司 編著 「入門心理学」 1988 北樹出版
 早坂泰次郎 編著 「新版 現代人の心理学—科学としての人間理解—」 1981 川島書店
 林 保 編著 「教養の心理学—動機のはたらきと行動—」 1983 朝倉書店
 林 洋一・榎本博明 編著 「現代心理学」 1986 北大路書房
 日上泰輔・糸川民生・上岡国夫 著 「心理学」 1984 福村出版

- 平出彦仁 編著 「こころの探求—心理学入門—」 1986 八千代出版
- 平野 眞 著 「心理学への招待」 1989 北樹出版
- 堀端孝治・高橋 超・磯崎三喜年 編 「人間行動論入門—心と行動をさぐる—」 1988 北大路書房
- 堀ノ内 敏 編著 「心理学（改訂版）」 1984 福村出版
- 伊吹山太郎 監修 「心理学へのいざない」 1989 ナカニシヤ出版
- 市川典義・増田末雄 編著 「心理学—基礎と応用—」 1982 福村出版
- 市川典義・佐竹宣夫 編著 「社会生活の心理学」 1989 福村出版
- 井出 正・塚本三朗 編著 「人間理解の心理学」 1985 福村出版
- 今田 寛・宮田 洋・賀集 寛 編 「心理学の基礎」 1986 培風館
- 今井四郎・大黒静治 編著 「心理学の基礎—心を知るためのX章—」 1987 アカデミア出版会
- 今井義正 編著 「心理学」 1981 八千代出版
- 井上恵美子・平出彦仁 編著 「現代社会の心理学」 1980 博文社
- 石田雅人・大淵憲一 編 「心の内と外—心理学の諸相—」 1986 勁草書房
- 石川英夫 著 「心理学の探求」 1989 文化書房博文社
- 磯貝芳郎 編 「心理学要論」 1987 学術図書出版社
- 伊藤隆二 編 「心理学への招待」 1987 八千代出版
- 糸魚川直祐・春木 豊 編 「心理学の基礎」 1989 有斐閣
- 蔭山庄司 監修 「心理学—人間行動の科学—」 1982 北大路書房
- 神戸忠夫・藤井龍岳 編著 「改訂 心理学」 1987 八千代出版
- 神谷育司 編 「心理学—人間理解の方法序説—」 1988 福村出版
- 金子隆芳 編 「現代心理学要論」 1982 教育出版
- 加藤義明・中里至正 編著 「入門心理学」 1987 八千代出版
- 木村忠雄・瀬島順一郎・東福寺一郎・森下高治 著 「人間行動の心理」 1986 福村出版
- 金城辰夫・野口 薫ほか 著 「心理学概論」 1984 有斐閣
- 北尾倫彦・小嶋秀夫 編 「心理学への招待」 1986 有斐閣
- 児玉斉二・岡田洋子・佐藤 誠・村井健祐ほか 著 「新訂 心理学の基礎」 1989 啓明出版
- 駒崎 勉 著 「新訂 パーソナリティの心理学」 1985 八千代出版
- 小杉正太郎・荘巖舜哉・利島 保・長田久雄 共著 「心の発見・心の探検30—心理学入門レシテーション—」 1988 ミネルヴァ書房
- 隈江月晴・高橋正臣・田中宏二・長尾 勲 編 「心理学—基礎と展開—」 1984 ナカニシヤ出版
- 黒田正典・徳田安俊・木村 進 共編 「応用的見地からの一般心理学」 1987 八千代出版
- 真辺春蔵 著 「一般心理学」 1981 晃洋書房
- 丸山和夫 監修 「心理学」 1988 建帛社
- 増田末雄 編 「心理学」 1981 学術図書出版社
- 南 博 著 「人間行動学」 1980 岩波書店
- 宮城音弥 著 「新・心理学入門」 1981 岩波書店
- 水口礼治 著 「市民のための心理学」 1986 福村出版
- 水野節子 編 「改訂 現代心理学」 1988 学術図書出版社
- 森 重敏・帆足喜與子 編 「人間生活の心理学」 1983 垣内出版
- 森 重敏 編著 「改訂 心理学」 1985 八千代出版
- 森 武夫 編著 「心理学展望」 1985 八千代出版
- 森野礼一 編著 「現代の心理学」 1982 ミネルヴァ書房
- 本明 寛 編 「新・心理学序説」 1981 金子書房
- 本明 寛・浅井邦二ほか 著 「現代心理学入門」 1985 実務教育出版
- 麦島文夫・安香 宏・森 武夫 著 「新版 心理学要論」 1987 有斐閣

- 村中兼松 編著 「現代の心理学」 1980 八千代出版
 村中兼松 編著 「心理学要説」 1984 八千代出版
 村田孝次 著 「教養の心理学(四訂版)」 1987 培風館
 無藤 隆・苧阪直行・細野純子 著 「心理学とは何だろうか」 1986 新曜社
 長尾 勲 編 「心理学を学ぶ」 1989 ナカニシヤ出版
 永沢幸七 著 「人間性の心理学」 1982 教育出版
 中川大倫 著 「心理学概論II」 1985 放送大学教育振興会
 中里 弘・飯塚雄一 編著 「心理学入門」 1982 八千代出版
 名城嗣明・東江平之 編著 「初めて学ぶ心理学」 1986 福村出版
 根本和雄・小島康次 編著 「理解とふれあいの心理学」 1988 ミネルヴァ書房
 西 昭夫・国分康孝・山中祥男・菅沼憲治 編 「心理学」 1984 福村出版
 西村忠恭・恩田 彰・伊藤隆二 編 「人間の心理学」 1984 八千代出版
 野口 薫 編著 「心理学の基礎」 1984 北樹出版
 能見義博 編著 「基礎心理学」 1983 八千代出版
 野西恵三 編 「改訂 心理学」 1986 北大路書房
 小川再治 著 「四訂版 心理学」 1981 文化書房博文社
 小川嗣夫・岸本陽一・日高精二・三戸秀樹・宮本博尹 共著 「心理学通論」 1980 建帛社
 大橋正夫・長田雅喜 編 「心理学(改訂版)」 1980 福村出版
 大村政男・岡村浩志・清水敦彦・常盤 満 著 「心理学概論」 1980 福村出版
 太田垣瑞一郎 編著 「現代心理学」 1988 八千代出版
 大山 正・詫摩武俊 編著 「心理学概論I」 1985 放送大学教育振興会
 岡堂哲雄 著 「心理学—ヒューマンサイエンス—」 1985 金子書房
 岡本栄一ほか 著 「こころの世界—図説心理学入門」 1983 新曜社
 佐伯茂雄・野々村 新・田之内厚三 著 「改訂 心理学の展開」 1984 福村出版
 斎藤 勇 編 「図説 心理学入門」 1988 誠信書房
 関 忠文・大村政男・土屋 守・岡村一成 編 「心理学セミナー」 1984 福村出版
 関口茂久・岡市広成 編著 「行動科学としての心理学」 1987 プレーン出版
 柴山茂夫・林 文俊・河合優年 著 「心理学アラカルト30」 1987 福村出版
 重野 純 著 「心理学入門」 1984 北樹出版
 島津一夫 監修 「心理学要説」 1981 誠信書房
 清水宗夫・高嶋正士ほか 共著 「心理学(第2版)」 1989 医学出版社
 清水栄長・白佐俊憲 著 「教養心理学入門(改訂版)」 1986 川島書店
 塩川武雄・岡野恒也・高嶋健一・中森正純 著 「要説 心理学」 1983 酒井書店
 白井 常 編著 「心理学—一人はどう生き、考え、集うのか—」 1982 光生館
 静岡教養心理学研究グループ 編 「現代心理学—心を科学する—」 1989 酒井書店
 末永俊郎 編 「新版 現代心理学入門」 1988 有斐閣
 杉本助男 編著 「心理学30講」 1984 北大路書房
 杉村 健・池川三郎 編著 「改訂 心理学入門」 1982 学苑社
 杉村 健 編著 「こころと行動の科学」 1986 小林出版
 鈴木 清 編 「心理学—経験と行動の科学—」 1988 ナカニシヤ出版
 田島信元・田島啓子・清水弘司 編著 「現代心理学のすすめ」 1987 福村出版
 武衛孝雄・難波精一郎 編著 「要説 心理学」 1984 学術図書出版社
 田村正農 著 「現代心理学要説」 1985 一粒社
 田中博正・関口茂久 編著 「心理学」 1982 協同出版
 田中国夫ほか 編 「図解 心理学」 1988 北大路書房

- 辰野千寿 編 「心理学」 1985 日本文化科学社
 東海大学一般教育研究会 編 「心理学」 1983 東海大学出版会
 東京都私立短期大学協会 編 「新訂版 心理学」 1981 酒井書店・育英堂
 東京都私立短期大学協会 編 「教養の心理学」 1983 酒井書店・育英堂
 十島雍藏・平川忠敬・片平真理 共著 「人間行動の制御科学としての心理学」 1981 学術図書出版社
 内山道明 編 「心理学の世界」 1980 福村出版
 氏原 寛・並河信子・浪花 博 編 「心理学—こころの表と裏を探る—」 1981 学術図書出版社
 氏原 寛・西村州衛男・東山紘久 共著 「心理学」 1985 培風館
 梅岡義貴・大山 正 編著 「心理学の展開(改訂版)」 1983 北樹出版
 若松利昭・梶田正巳・杉江修治 編 「テキスト 心理学」 1987 福村出版
 和気典二・和気洋美・片桐雅義ほか 著 「心理学の基礎と応用」 1985 福村出版
 渡辺浪二・三星宗雄・角山 剛・小西啓史 編著 「心理学入門」 1987 プレーン出版
 渡辺 康 編著 「心理学概論」 1981 八千代出版
 八重島建二ほか 著 「現代心理学」 1986 培風館
 山内宏太郎 編著 「はじめての心理学」 1989 北樹出版
 横山 明・野呂 正 編 「生活・教養の心理学」 1983 学術図書出版社
 横山雅臣・徳田克己 編著 「こころのサイエンス—若い女性のための心理学入門—」 1988 文化書房
 博文社
 吉田俊郎 著 「基礎心理学」 1983 北樹出版
 吉岡一郎 編著 「あなたの心理学」 1985 北大路書房

引用文献

- 花沢成一 1986 P-Fスタディ パッケージ・性格の心理, 6, 111-124, プレーン出版.
 秦 一士 1987 日本における P-F Study の研究—文献目録—甲南女子大学人間科学年報, 12, 73-92.
 林 勝造 1985 ローゼンツァイク P-Fスタディ 精神科 MOOK, 10, 77-88, 金原出版.
 大村政男・花沢成一・佐藤 誠 1985 新訂・心理検査の理論と実際, 駿河台出版.
 住田勝美・林 勝造・一谷 彊 1964 ローゼンツァイク 人格理論, 三京房.
 住田勝美・林 勝造・一谷 彊ほか 1987 P-Fスタディ解説—1987年版—, 三京房.